

児童キャンプの教育的効果に関する一研究

—自主性診断検査(DTI)からみた自主性の効果を中心として—

馬 場 進一郎 (日本体育大学)

野外教育・客観テスト・測定評価

I. はじめに

学校及び社会の中で、野外活動(特にキャンプ)が盛んに行われるようになったのは、昭和31年に、文部省から「青少年野外活動の奨励について」という通達が出されてからである。

青少年を対象としたOrganized Camp(集団で組織的に行なわれるキャンプ)は、一般に教育キャンプと解され、「総合教育の場」としてその意義が重視されている。しかし、我が国における教育キャンプの形式は、欧米等のキャンプに比べ、比較的短期間のキャンプが主流を成していることから、その期間の中で教育効果の多くを期待するのは不可能と思われる。また、1泊2日から3泊4日といった短期キャンプにおいて、どの様な効果がどの程度期待できるかについても不明である。ところが、短い日数のキャンプにもかかわらず、今日までの間、キャンプが社会の中に定着し、実施されてきているということは、何らかの効果を期待しているからに他ならない。

文部省より出された『教育キャンプ指導の手引』¹⁾によると、「教育キャンプは、何にもましてキャンパーの自主性と創造性の重んぜられるところ…」とされている。

また、キャンプに関する文献等において、自主性は、一般に教育効果が期待できるとされていることから、「自主性」に焦点を当て、研究の題材として取りあげた。

これまでの研究のうち、キャンプの効果として自主性を客観的に捉えた研究は、松田ら²⁾の他ほとんど見あたらない。

倉本ら³⁾は、キャンプの機能について、自信をもって行動する、友人関係、自立性などに効果があるとしている。井筒ら⁴⁾は、親は子供の自主性が伸びることを期待してキャンプに参加させている割合が高く、キャンプ終了3か月後の調査では、参加者のうち、27.1%の者の自主性が伸びていると報告している。ただし、これらの研究は、あくまで親からみたキャンプの効果として自主性を捉えたものであり、実際にキャンパーを被験者としたものではない。

しかし、仮りに親の判断が正しく、また、一般的な教育キャンプにおいて、教育効果を得ることが可能であるとすれば、自主性の向上を判断するのに適切な客観テストをキャンパーに対して用いた場合、その結果は向上を示すのではないかという仮説が考えられる。

したがって、本研究では、この点について検証するために、3泊4日の青少年キャンプを事例に、キャンプが児童の自主性に及ぼす効果を実際に参加児童を被験者とし、客観的検査を媒介手段として測定・評価し、さらにその効果

の定着性について検討することを目的とした。ここで明らかにしたいのは、次の点である。

課題1) キャンプの体験学習を通して、参加児童の自主性が向上するかどうか。

課題2) 仮りに向上が見られた場合、それは一時的なものか、ある程度持続的なものか。

II. 研究の方法

1. 調査の内容及び方法

本研究は、キャンプに参加した児童に対し、自主性診断検査を用いたものと、その父兄に対し、質問紙を用いた調査から成り立っている。

それぞれの内容・方法については、表1に示した通りである。

なお、課題2)の検討にあたっては、キャンプ終了時と3か月後との間に、児童の自然的な発達に伴う要素が介入する可能性が考えられることから、あくまで「自然的な発達の有無」を見ることを目的に、統制群として、キャンプ未経験児童78名を設定した。

2. キャンプの概要

A・Bキャンプの学習内容は、相互に共通する部分が多く、それぞれの学習内容が目標としている点は、類似している。

班編成は、学年・性別・過去の参加歴及び各人の健康状況を考慮した上で、各班均等になるように縦割りの編成を行い、1班10名前後で構成された。

指導方法はA・Bキャンプともに、①実施主体(指導者)の指導力を強調する方法、②参加主体(キャンパー)の自主性にゆだね指導者は助言・補助を与える方法によって展開され、後者②の方法を強調した。

参加主体の自主性に重点を置いた学習内容は、両キャンプ共に特に3日目を中心に設定された。

なお、A・Bキャンプは、日本キャンプ協会公認の上級指導者がディレクターとして配置され、カウンセラーは、日本キャンプ協会または日本余暇文化振興会の指導者資格を有する学生が担当し、指導にあたった。

3. 父兄用調査用紙の内容

質問紙は、(1) キャンプに対する親の期待、(2) キャンプの体験学習による影響の2点から構成されている。後者は主にDTIの各カテゴリーについて、キャンプ後の傾向を5段階評定法により調査した。

表 1 調査の内容及び方法

調査時期	児童に対する調査		父兄に対する調査
	1. キャンプ実施前と実施後	2. キャンプ終了3か月後	キャンプ終了3か月後
調査対象	1984年の夏期休暇を利用して実施された、「自然活動子供村：キャンプ」(日本余暇文化振興会主催)に参加した、小学校5.6年の児童145名。その内訳は、 Aキャンプ：5年生50名、6年生50名 Bキャンプ：5年生26名、6年生19名	1)Aキャンプで被験者となった5.6年生のうち、キャンプ実施前と実施後における検査の回答が有効であった児童92名。 (実験群とする) 2)S小学校の5年生44名、6年生34名の2クラス：計78名。 (統制群とする)	Aキャンプで被験者となった5.6年児童の父兄、92名。
調査方法	石川勲・藤原喜悦「自主性診断検査(Diagnostic Test of Independence:DTI)」(金子書房)を用い、キャンプ場到着時とキャンプ終了時の2回実施した。 (キャンプ地における集合調査)	1)実験群：DTIをキャンプ終了3か月後に郵送して実施した。(郵送法) 2)統制群：1回目のDTI実施から約3か月後に、再度実施した。(集合調査)	キャンプ終了3か月後に、DTIとともに調査票を同封して実施した。 (質問紙郵送法)
調査期間	1984年7月25日～8月10日	1)実験群：1984年10月25日～11月30日 2)統制群：1984年10月1日及び12月18日	1984年10月25日～11月30日
回収数等	DTI配布数145枚、有効回収数134枚 回収率92.4%	1)実験群： DTI配布数92枚、有効回収数52枚 回収率56.5% 2)統制群については、 100%の回収率を得た(78枚)。	調査票配布数92枚、有効回収数50枚 回収率54.3%

4. 結果の処理について

(1) キャンプ実施前と実施後の検定については、検査によって得られた粗点(正答数)により、学年別・性別・被験者全体についても検定(個体の比較)を用い、比較検討した。

さらに、粗点を「DTI解説」⁵⁾に基づき、すべての項目についてパーセンタイル(以下PR)として算出し、各項目について30PR以下の者をA群、40～60PRの者をB群、70PR以上の者をC群として分類し、A群を各特性または自主性の低い群、B群を中程度の群、C群を高い群として、各項目ごとにそれぞれを粗点により比較した。

(2) キャンプ実施後と実施3か月後の比較については、(1)と同様に処理した。

Ⅲ. 結果と考察

1. キャンプ体験が自主性に及ぼす影響について

児童に対する調査のうち、キャンプ実施前と実施後におけるDTI得点を比較した結果については、表2～表4に示した通りである。

キャンプは、教育効果の1つとして自主性の育成に有効であるとされているが、自主性を本検査に基づいて分類した場合、キャンプを体験することによって、その構成要素

表 2 被験者全体におけるキャンプ実施前後のDTI-得点の比較

N=134	キャンプ実施前		キャンプ実施後		有意水準
	M	SD	M	SD	
1. 自発性	14.66	4.14	15.27	4.15	*
2. 主体性	14.31	4.04	14.51	4.74	
3. 独立性	14.65	3.91	15.43	4.33	**
4. 自己主張	12.78	4.23	13.89	4.51	***
5. 判断力	13.90	3.90	13.68	3.57	
6. 独創性	15.72	4.58	16.19	4.71	
7. 自律性	14.51	4.58	15.28	4.87	**
8. 自己統制	14.47	4.54	15.30	4.66	*
9. 責任性	16.54	3.98	17.43	4.44	**
10. 役割認知	16.12	4.17	16.60	4.29	
自主性	147.66	30.28	153.54	33.86	***

* P<.05 **P<.01 *** P<.001

がすべて向上するわけではない。表2・表3からわかるように、主に(1)自発性、(3)独立性、(4)自己主張、(7)自律性、(9)責任性、(10)役割認知のような特性が向上するといえる。しかも、参加者全体が向上するのではなく、A群のようにキャンプ参加当初の段階で、各特性が低かった者に伸び率が高いといえる(表4)。

表 3 キャンプ実施前と実施後のDTI-得点の比較
学年別・性別・全体における有意差 (t検定による)

	5年	6年	男子	女子	全体
1. 自発性	**			**	*
2. 主体性					
3. 独立性	*		*		**
4. 自己主張	**	*	***		***
5. 判断力					
6. 独創性					
7. 自律性		*		**	**
8. 自己統制	*			*	*
9. 責任性	**		*	*	**
10. 役割認知	*				
自主性	***	*	***	**	***

* P<.05 **P<.01 *** P<.001

低下を示した特性：女子－ 5. 判断力(P<.05)

表 4 キャンプ実施前後のDTI-得点の比較
群別における有意差 (t検定による)

	A群	B群	C群
1. 自発性	***		
2. 主体性			
3. 独立性	***		
4. 自己主張	***		
5. 判断力	**		
6. 独創性	*		
7. 自律性	**	*	
8. 自己統制	**	*	
9. 責任性	***		
10. 役割認知	*	*	
自主性		***	**

* P<.05 **P<.01 *** P<.001

低下を示した特性：B群－ 5. 判断力(P<.05)

C群－ 5. 判断力(P<.001)

しかし、総計項目である自主性については、A群よりはむしろB群・C群に向上が認められていることから、キャンプ実施前の段階において、自主性を中程度もしくはそれ以上に備えていた者の、特に各人の低い部分における特性の伸長に、キャンプが効果的であったと推察される。

したがって、参加当初の段階で各特性が全体的に低く、自主性がA群に属するよう者については、必ずしもキャンプが好影響を及ぼしたとはいえない。このように、総合的に自主性が低かった者については、指導方法を中心に、学習内容や日数等、つまりキャンプの質や量による検討を加え、改善する必要があるといえる。また、一般的な教育

キャンプでは、効果はあまり期待できないと考える。

学年別の効果に着目すると、6年生よりは5年生に向上を示している特性が多いことから、6年生に比べ5年生の方が、キャンプの体験を肯定的に受けとめていることが推察される。

また、男子は特に自己主張に、女子は自律的な統制行動に効果が認められた。

藤原⁶⁾は、自己主張について「児童期においては、友人集団に同調しようとする傾向が強まるが、他方、学習や遊びなどにおいて他者に優越し、仲間から認められたいという要求が強くなり、競争という形態で自己主張が現われる」としている。このことから、グループ単位の活動や各種の体験学習の場面で、自己主張の向上に影響を与えたものと思われる。また自己統制について藤原⁷⁾は、「子供の発達段階に応じて適度に成功体験を持たせ自信をつけるように養育することが、自己制御の順調な発達にとって必要である」としていることから、キャンプの各場面における成功体験や集団の規律を守ること、自分のことは自分の力でやりぬくこと等を協議したカウンセリングが、自己統制・自律性に好影響を及ぼしたものと推察される。

これまでに述べた自主性(各特性)の向上は、キャンパー各人がキャンプ体験をもとに、それぞれの内省によって捉えた結果と判断することができる。当然そこには個人差や学年差が存在するものの、キャンプがきっかけとなった変容に他ならないと考えられる。したがって、結果に示された有意差は、キャンプにおける指導の効果またはキャンプが有する独自性による効果(相乗効果)と判断することができる。

2. キャンプ体験によって得られた自主性の持続性について

実験群について、キャンプ実施後と実施3か月後におけるDTI得点を比較検討した結果、5年生の自発性に低下、責任性に向上がそれぞれ認められたのみで(P<.05)、6年生、男子、女子、全体においては、有意差は認められなかった。一方、統制群は、6年生の自発性、全体の自律性に関し発達が認められたが(P<.05)、それ以外の特性については、3か月という過程では発達が認められていない。

すなわち、以上の結果より、キャンプ終了時における自主性の変容は、検定結果からは一時的な効果ではなく、3か月間は持続されていると推測することができる。

また、5年生の責任性とA群の役割認知については、3か月後さらに向上が認められていることから、キャンプの刺激がその後の日常生活に好影響を及ぼしたものと推察される。

3. 親からみたキャンプ体験後の子どもの変容について

キャンプに対する親の期待及び参加させた最大の理由については、回答が分散したが両者の上位に共通した項目がみられた。特に参加させた最大の理由については、1位と

3位の項目の間で差が認められていることから($P < .05$)、親は共同・協調性が養われる、友だちができ、つき合い方を覚える等を主な期待として、参加させていることが推測される。3位以下の項目は、自主的行動が身につく、自然の理解・愛好心が養われる、外交的な性格になる等であった。また、これらの参加させた最大の理由について、74%の親が効果を認めている。この結果は、井筒らの研究⁸⁾と一致するところが多く、親は何らかの教育的意図を持って、キャンプに子どもを参加させていることがうかがえる。

親がキャンプ後に、子どもの日常生活の観察を通して向上を認めた自主性の特性については、表5に示したように、役割認知のみといえる。

表5 親から見たキャンプ体験後の子どもの自主性の変容について

	+	±	-	D. K.
1. 自発性	60	38	0	2
2. 主体性	48	44	0	8
3. 独立性	46	52	0	2
4. 自己主張	42	54	0	4
5. 判断力	38	52	0	10
6. 独創性	38	52	2	8
7. 自律性	36	58	2	4
8. 自己統制	40	50	4	6
9. 責任性	58	38	0	4
10. 役割認知	60*	32	2	6
自主性	58	42	0	0

数字は%を示す

* $P < .05$

なお、+は 向上した、やや向上した
 ±は 変わらない
 -は やや低下した、低下した
 D. K.は わからない を示す

その他の特性については、+と±の間に差が認められなかった。

役割認知については、子どもの自己評価においても、3か月後の調査で向上が著しい特性である。

つまり、親は顕著に向上が見られた特性のみ効果を認めていることから、家庭場面に限定された親の観察には限度があり、子ども自身の内省部分にかかわる傾向までは、適確に捉えることができないものと推察される。

したがって、主に家庭場面から捉えた親の評価と検査結果の両者からキャンプの効果を検討するならば、特に役割認知については、キャンプの刺激が好影響を及ぼし、キャンプ後の日常生活の中において、最も効果が期待できる特性であると判断される。

IV. まとめ

3泊4日のキャンプ体験は、キャンプ参加当初におけるキャンパーの特に低い特性を伸長することに、有効に機能したといえる。

総合的な自主性の向上は、参加当初に中程度以上の自主性を持ち合わせていた者でなければ、期待できないといえる。

キャンプ体験によって得られた自主性は、キャンプ終了後3か月間は、日常生活の中においても持続されていると考えられる。特に役割認知は、キャンプ後に効果が期待できる特性であることが推察された。

V. 今後の課題

キャンプによって得られる効果は、自然環境下における体験学習の内容や指導者及びその指導方法によるところが大であると考えられる。しかし、本研究の範囲からは、自主性に影響を及ぼした要因までは明らかにすることができなかった。

また、参加時点において自主性が特に低かった者に、総合的な自主性の向上が認められなかったという点も不明である。

したがって、今後は以上のような点を究明するとともに、観察法等の手法も加え、教育効果の検討を計りたい。同時に参加者の能力に合わせたキャンプの在り方も検討される必要があると考える。

注記・引用文献

- 1) 文部省編 『教育キャンプ指導の手引』 P.5 1956
- 2) 松田誠一・飯田稔 「キャンパーの自主性育成に関する研究」 日本体育学会第34回大会号 P.605 1983
- 3) 倉本満枝・飯田稔・他 「キャンプ参加者の母親の意識について」 日本体育学会第34回大会号 P.682 1981
- 4) 井筒次郎・他 「子どものキャンプにおける教育的効果に関する一考察—その学習内容の質と量について—」 日本体育大学助学会研究報告第2号 P.P61-71 1983
- 5) 石川勤・藤原喜悦共著 『自主性診断検査解説』 金子書房 P.P1-17 1983
- 6) 依田新監修 『新・教育心理学事典』 金子書房 P.315 1977
- 7) 内山喜久雄監修 『児童臨床心理事典』 岩崎学術出版社 P.246 1983
- 8) 井筒前掲書 4)